

公民館における子育て期の親の学びとその支援について① — 一家から一步を踏み出し子育て主体として成長することを支える講座づくり —

宮 嶋 晴 子

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年10月28日受付、2022年12月12日受理)

要 旨

本稿は、社会教育施設としての公立公民館の具体的実践から子育て期の親の学びについて研究した第1報告である。結論としては、疎外や閉塞状況の中で子育てしている親たちが家から一步を踏み出し、公民館の子育て講座に参加し、子育て主体として成長していくプロセスを見ることができた。その子育て講座は、まず参加前の段階では、公民館に親子をいぎなう広報「公民館だより」の工夫で働きかけ、参加し始める段階になると、体験型講座や随所にちりばめられた人とかかわるしくみにこだわり実施されていた。

1. 背景と問題意識—現在における「子どもや子育て課題」を巡る状況—

1989年の「1.57ショック」後、「子育て支援（政策）元年」と言われた1994年のエンゼルプランがスタートしてから28年の歳月が流れた。この間、少子化対策、孤立や不安の子育て、児童虐待、子どもの育ちの課題（生活習慣、メディア依存、遊び）、ワークライフバランス、貧困問題などが「子ども・子育ての課題」ととらえられ、経済、福祉、教育、男女共同参画の領域から多岐に渡る子ども・子育て課題解決のための政策が次々登場してきた。しかし、上昇しない合計特殊出生率、歯止めがかからず年間相談件数が20万人を超えてしまった児童虐待の状況を見る限り、それらの子ども・子育ての政策において、前述した「子ども・子育ての課題」は改善や解決に至っているとは言いがたい。

これまで厚生労働省や内閣府が主幹する少子化対策や子ども・子育て支援政策においては³、一般的に経済支援や福祉サービスを提供する子育て支援サービスが多く見受けられていた。その結果、子どもの育ちや子育てという営みは、人が主体的に取り組む営みであるにもかかわらず、各家庭の親たちが支援サービスを利用する客体にとどまる構造が生みだされてきたのではないだろうか。

もちろん「教育」の支援として、文部科学省は「家庭教育」を支援する事業に取り組んでいる⁴。具体的には、「家庭教育手帳」の配布など子育て家庭に「個別」に行われる取り組みから「学校や地域」に働きかけられている取り組みもある。しかし、家庭教育手帳に代表される家庭教育の「個別支援」では家庭内だけへの働き掛けに留まることから、「人との接点」や「つながり」が生まれにくい状況が見受けられる。さらに、家庭教育支援は私事的な領域であり、プライバシーや個人情報尊重する観点から、支援の進め方によっては、地域や子育て仲間から当事者を遠ざけてしまう状況が生まれているのではないかと考えられる。一方、公民館や学校等によるアウトリーチの学びの場の取り組みも一部で行われているものの、そもそもそこに来意識の高い人にしか支援が届かず、「支援したい人が来てくれない」という学習支援における普遍的な課題も存在し続けている。

本来、子ども・子育ての問題解決を図るための支援実践では、「サービス支援」や「個別支援」のみにとどまるのではなく、「親が成長するための支援」を考えていくことが必要なのでないだろうか。とりわけ、親自らが子育ての主体として成長していくためには、まず「学びに出会い」そして、「自らその学びに継続して身を置き続ける」支援実践が何より必要だと思われる。

2. 研究の目的

このような社会状況の中で、子育てを楽しみ、健やかな子どもの育ちを支え、地域づくりの担い手として生き生きと暮らす親たちを生み出し、支えてきた公民館実践が存在する。この公民館にかかわる親たちの多くが乳幼児を育てている時期に公立公民館が主催する「子育て講座」に参加したことが契機となり、家から一步を踏み出し、地域活動を始め、現在に至り、子どもや子育てをテーマに地域づくりの担い手として活躍

している状況が見受けられる。

そこで本稿では、この実践をもとに公民館における子育て期の親の学び、並びにその支援のあり方についてあきらかにすることを目的とする。具体的には、子育て期を過ごす親たちが疎外や閉塞状況の中で、どのような公民館による仕掛けや工夫、アプローチによって家から一步を踏み出していくことができたのか、また公民館の講座における学びの内容とは何だったのか、またその支援とはどのようなものだったのかをとらえることを試み、本稿をこれにつづく研究全体の第1報告と位置付けたい。

3. 研究の方法

本稿では、公民館の子育て講座を事例として取り上げる。ここで取り上げる公民館は、福岡県内にある都市の条例公民館（公立公民館）であり、公民館事業として取り組んできた2005年から2012年までの「子育て講座」のあり方について分析を試みる。なぜこの時期を取り上げるかについては、2005年に配置された職員が中心となって企画立案した「子育て講座」を契機に参加人数が著しく増加し、これに合わせて親の主体的参加が多く見受けられるようになったことが理由である。この期間の子育て講座に注目することで、公民館におかる子育て期の親の学びおよびその支援のあり方を検討することが可能となる。この講座は、月2回、年間約24回実施された通年講座である。事例の分析の視点は、家から一步を踏み出す広報「公民館だより」の記述上の工夫と、親自らが参加したくなる仕掛けとしての「講座の内容」とともに、講座のなかで具体的にみられる「親の姿や人とのかかわり」がどのようなものであったのかとする。これらについて公民館資料および職員の実践記録資料をもとに分析を進める。

4. 結果と分析①一家から一步を踏み出す広報「公民館だより」の工夫ー

この「公民館だより」⁵は、一般的に「館報」として毎月1回15日に発行されている。そこには、公民館主催の講座やイベント、またサークルや団体による自主活動、さらに地域で取り組む行事や地域の住民の人が活躍している活動などの掲載のほか、「図表1から図表3」にあるように、子育て期の親が家から一步を踏み出すための以下の5つの工夫がちりばめられていた。

図表1 「公民館だより」全体の一例



① わかりやすい公民館の活動紹介（「図表2」参照）

図表2 「公民館だより」の「子育て講座」コーナーの一例

図表3 「公民館だより」の「子育て講座」お誘い文言

- どのコーナーも写真がふんだんに盛り込まれており、どんな活動をおこなっているのか、またどんな人が、どんな様子で参加しているのかイメージしやすい内容になっている。
- キャプションを多用して記事が作られており、子育てに追われる忙しい親がゆっくり文章を読み込まなくても内容が理解しやすい紙面になっている。

② いつからでも参加が可能であるとの呼び掛け（「図表3」参照）

- この公民館では、月2回講座を年間約24回実施しており、年度始めからの通年講座ではあるものの、いつからでも参加可能な講座にしている。ここでは常に「みんなで楽しく子育て、参

「親も育つ・子ども育つ」
みんなで楽しく子育てしよう！
子育て講座参加者 随時募集中

対象：0～6 歳児親子
日時：月2回（第2・4火曜日）
10：00～11：30

今後の予定

- 10月25日（日） プレーパーク 日曜日なのでパパも一緒に！
- 11月10日（火） 絵本と食とエコ 講師：_____

お申込みは公民館まで

加してみませんか！」や「参加者随時募集中」を「公民館だより」で呼び掛けており、親の都合や子どもの月齢など各々のタイミングに合わせて「行ってみようかな」という気持ちを後押しする紙面構成になっている。

- ・「子育て講座」コーナーには、毎回「講座の対象や活動日時」とともに「今後の活動日程や内容」の予定が示され、具体的な内容やスケジュールを知ることが容易になっている。
- ③ 地域で講座の存在を知る人が増えることによる関係の広がり
- ・「公民館だより」は、全戸配布である。多世代のあらゆる地域住民が目にすることから、子育てに忙しい親の目に触れなかったとしても、親の周辺の人たちが「子育て講座」の内容やそこに参加している親子の存在を知ることが可能となる。そこで、「公民館だより」を目にした地域住民からも新たな親子への声掛けがなされ、講座参加につながることもある。
- ④ 活動をふりかえり参加意欲が増していく工夫
- ・「子育て講座」に参加し始めた親子は、自分たちが参加した講座が「公民館だより」で紹介されていくことにより、活動をふりかえり、あらためて面白さや意義に気づくことができる。結果として、継続して講座に参加していくことにつながる。なかには、参加していない知り合いに「口コミ」で楽しさや面白さを伝える人もいる。
- ⑤ 地域の多様な人や団体の活動に気づく契機（「図表1」参照）
- ・毎回、自分も参加した「子育て講座」の記事が掲載されることによって、次第にその前後に掲載されている記事や「公民館だより」全体に目が向くようになっていく。そこで、自分の暮らす地域に、多様な人や団体が存在していることに気づいていく契機となる。そして、公民館の講座に参加していく中で、「公民館だより」の中に登場している人や団体と実際に対面していく機会も生まれる。

5. 結果と分析②—公民館「子育て講座」の内容とそこに見る親の姿や人とのかわり

「公民館だより」などの広報の工夫により、家から一歩を踏み出した親たちは、どのような公民館での「子育て講座」に参加していたのだろうか。

(1) 公民館「子育て講座」の内容

「図表4」は、公民館「子育て講座」の2008年度の年間プログラム⁶であり、「カテゴリー、テーマ、講師など」を示した一覧例である。以下の記述は、2006（平成18）年度から2009（平成21）年度の4ヵ年の年間プログラムを分析対象とし、そこから以下6つの特徴を抽出したものである。

- ① 丁寧に友だちづくりを後押しする「仲間作り」ワークショップ
- 毎年、最初の開講式で「顔や名前を覚える」「友達になるためのはじめのいっぽ」をねらいとした「仲間作り」ワークショップが時間をかけて行われていた。
- ② 親子のニーズと子どもの育ちの環境から増えてきた「遊び」の内容
- 「遊び」のカテゴリーが、2006年講座「全21回中7回」、2007年講座「全22回中5回」、2008年講座「全23回中7回」、2009年講座「全23回中9回」と多くを占め、さらに概ね増加していく経過をたどっていた。
- ③ なかでもく外遊びの必要性から「プレーパーク」が増加
- 「遊び」のカテゴリーでは、「プレーパーク」が、2006年講座では「年0回」だったが、2007年講座では「春と秋の年2回」、2008年講座では「季節毎実施の4回」、2009年講座では「毎月実施の7回」と徐々に増えていた。
- ④ 地域における多世代交流や多文化交流の定例実施
- 「交流」のカテゴリーでは、2006年は高齢者大学との多世代交流の「年1回（高齢者1回）」だったが、2007年は中学生との交流事業を開始し「年3回（高齢者1回、中学生2回）」に、また2008年には「年4回（高齢者1回、中学生2回、外国人1回）」、2009年には「年3回（高齢者1回、中学生2回）」であり地域における多世代の人々との交流の定着や多文化交流などの事業が行われていた様子がわかる。
- ⑤ 講座の大半を占める学習方法「参加型体験学習」
- 「食」「手作り」「絵本」「体操」「音楽」の活動などは、ほとんどが親子の「体験活動」として取り組まれ

ている。毎年このカテゴリーで全講座の7～12回、「遊び」や「仲間づくり」の活動も「体験活動」であることから、講座全体の8割以上が「参加体験型学習」であったことがわかる。

⑥ 親が子どもから離れて学びに集中する「託児付き講座」の定例実施

毎年「託児付き」講座も実施されている。2006年、2008、2009年は「年3回」（2007年は「年2回」）実施しており、その講座のテーマは「救命救急、子どもの暴力防止プログラム、メディアについて、子どもとのコミュニケーション、食とからだ（調理実習含む）、遊びの大切さ、子ども理解、親支援講座、フラワーアレンジメント」など子どもの育ちに必要課題を中心とし多岐に渡る。また、中には大人の文化活動も盛り込まれていた。

⑦ 年度末の親のふりかえりアンケートから組み立てる次年度の講座の内容

「閉講式」では修了証を授与し、1年間の講座全体の満足度調査のほか、よかった内容、感想・意見、来年度やってみたいこと、学んでみたいことなどについてアンケートを実施しており、その結果を次年度の講座の企画に活かすことを基本にしていた。

図表4 「子育て講座」2008年度の年間プログラム一覧例

2008年度	テ マ	講師など
開講式	仲間作り	
遊び	春のプレーパーク	プレーパークの会
タッチケア	タッチケア	タッチケア講師
食	かんたんおやつ作り（デザート春巻き）	パン講師
音楽	レインボーコンサート	県共催事業
遊び	遠足（花公園）	
絵本	おはなし会	読みきかせサークル
遊び	おにいちゃんおねえちゃんと遊ぼう	子育て支援グループ
遊び	夏のプレーパーク	
音楽	リトミック	音楽講師
手作り	手型・足型アート	社会教育施設指導員
講座	子どもとのコミュニケーション	プログラムスペシャリスト（託児付き）
交流	中学生との交流	地域の中学生
遊び	秋のプレーパーク	
ヨガ	ヨガでリフレッシュ	ヨガ講師
講座	食べる・育つ	保育園園長（託児付き）
伝統行事	もちつき	公民館講座高齢者と一緒に
遊び	おもちゃのひろば	おもちゃコンサルタント
国際交流	英語であそぼう	フィリピン人母親
食	食育のおはなしと調理実習	管理栄養士（託児付き）
交流	中学生との交流	地域の中学生
遊び	冬のプレーパーク	
閉講式	修了証書授与、アンケート記入、茶話会	

(2) 講座に見る親の姿や人とのかかわり

「図表5」は、公民館の子育て講座に参加した親について、「a. 講座に見る親の姿」と「b. 講座で見られる人とのかかわり」について着目し、時系列にとらえて見えてきた傾向を記したものである。ここでは、「講座に見る親の姿」とそこから「講座で見られる人とのかかわり」の両方が行き来しあいながら、次のフェーズに展開している様子を見ることができた。

ここで見られた子育て講座を受講した親たちは、「楽しい、嬉しい、美味しい」を体験したり、自分に役

図表5 時系列にみた「講座に見る親の姿」と「講座で見られる親の人のかかわり」の傾向

a. 講座に見る親の姿	b. 講座で見られる親の人とのかかわり
「楽しい、嬉しい、美味しい」を体験する。自分に役に立つ話や興味深い話を聞く。ディスカッションやワークなど参加体験型学習をする。	「楽しい、嬉しい、美味しい体験」や「興味深い内容の話聞いた」ことによって周囲の人に「楽しいですね！面白いですね！美味しいですね！」など <u>会話が始まる</u> 。
↓ 次の講座にも参加する姿が見られる。	↓ 挨拶や言葉を交わすかかわりが増えてくる。
↓ 継続参加する姿が見られる。	↓ 継続参加によって、 <u>講座前後も含めて会話するかかわりが生まれている</u> 。
↓ 講座へ積極的に参加する姿があり、活動中、 <u>自然体で語り合う姿</u> が見られる。	↓ 受講生や公民館職員との人となり <u>がわかり、語り合うことを楽しむかかわり</u> が見られる。

に立つ話や興味深い話を聞き、ディスカッションやグループワークなど参加体験型学習を重ねていくことによって、周囲の人と「楽しいですね！面白いですね！美味しいですね！」など体験したことを共有するための会話を始めていく様子が見られた。そして、この講座で体験した面白さの共有によって会話する人同士のかかわりが生まれ、次の講座にも参加していく姿があった。次の講座のかかわりは、前回の共通体験からはじめることができ、挨拶はもちろん言葉を交わす際の話題も増えていたことがわかった。その後、その親たちは継続して講座に参加する姿が見られた。さらに継続的に参加していくことによって講座の前後の時間も含めて会話する機会が増え、そこで新たなかかわりが生まれ、講座にも積極的に参加するようになり、活動中に自然体で人と語り合う姿も見られていた。こうして、継続的に講座に参加し続けていくことになり、受講生や公民館職員との人となりははじめ、語り合うことそのものを楽しむためのかかわりづくりを進めていく傾向が見られた。

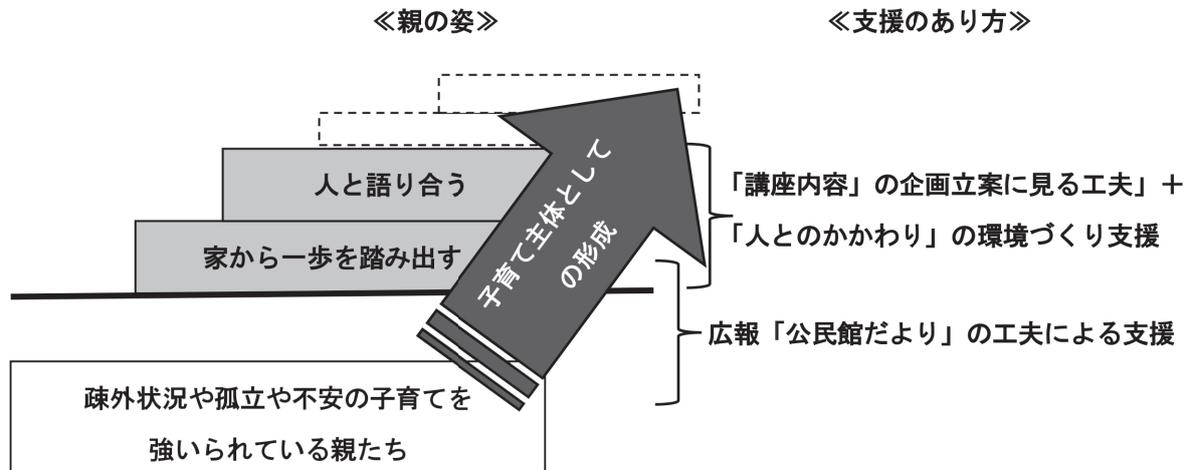
6. 考察

以上の結果と分析から、この公立公民館における子育て期の親の学びとその支援について考察を述べる。

「図表6」にあるように、まずこの公民館では、広報「公民館だより」の工夫によって、疎外状況や孤立や不安の子育てを強いられている子育て期の親たちが「家から一歩を踏み出す」ために大きな役割を果たしていたことがわかった。具体的には、親たち自身が公民館や子育て講座の内容を理解しやすい工夫、講座に参加しやすい働きかけが随所にちりばめられていた。また、公民館だよりは地域住民がこの講座を知る機会にもなり、地域ぐるみの子育て意識の広がりにつながっていた。さらに、参加し始めた親にとっては、講座の意義の理解がより深まり、地域（人や団体）を知る機会になっていたことから、公民館や地域への慣れを促し、親たちが「家から一歩を踏み出し」地域参加のスタートラインに立つ後押しになっていたと考えられる。

次に、子育て講座に参加を始めた親たちにとって「講座の内容」の企画立案の工夫が大切であったことがわかった。この「講座の内容」の充実と併せて「人とかかわり」の環境づくりが相互に関連し合い、講座内外で見られる多様な「親の姿」と「人とかかわり」を生み出し、公民館講座の参加を契機に日常的に「人と語り合う」というフェーズに移行していく姿をとらえることができた。ここに見られる具体的な公民館の子育て講座の工夫としては、「友だちづくり」を後押しし、親子のニーズや子どもの育ちの環境変化から「遊

図表6 公民館における子育て期の親の学びとその支援の実相について



び」、とりわけ「外遊び」を重視した内容構成、また地域における多世代や多文化との「交流」、講座での大半を占める「参加型体験学習」の推進、そして、親が子どもから離れて学びに集中する「託児付き講座」などがあげられる。さらに、年度末のアンケートなどを用いたふりかえりに、参加した親と一緒に取り組むことによって、次年度の参加意欲や参加ニーズが高まる講座内容に展開することを可能としていた。

その「講座の内容」と併せて「人とかかわり」を重視した環境づくりの具体的な支援では、前述した「楽しい、嬉しい、美味しい」という充実した「講座の内容」の学習の延長上に、会話が始まり、次の講座への参加に接続し、参加回数を重ねていく中で次第に挨拶や言葉を交わす参加者が増えている様子が見られた。さらに親が継続参加していくことによって、講座の前後も含めて会話するかわりが増え、付き合いが増え、講座への積極的な参加につながっている様子も見ることができた。そこでは自然体で語り合う姿や受講している他の親や公民館職員の人となりやわかってきたことにより、語り合うこと自体を楽しむかわりが見られていた。

最後に三井為友の実践研究を取り上げ、本稿であきらかになった「公民館における子育て期の学び」の考察を終えたい。三井は1963年に発行された『婦人グループ活動入門』⁷の中で、人々がより良い生活をしていくための「グループ学習」の良さを14項目に整理している。その内容の最初の4項目では、「①仲間がいて楽しい、②たくさんの人の知恵を集めるとよい考えがうかぶ、③自分の考えを出しあうことで正しさをたしかめることができる、④おたがいの経験を出しあうことで何倍もの経験を自分のものにすることができる。」としている。この段階では、個人の欲求や要求を満たすための「グループ学習」の意義であり、その後展開されるグループ組織としての意味や地域活動につながる意義だけではなく、個としての主体形成のプロセスを丁寧に述べていたことがわかる。すなわち三井は、その後の学びの展開のためにも本稿で見えてきたような公民館における子育て期の親の学びに示された「家から一步を踏み出し人と語り合う」支援が大切であることを論じていたと読むこともできる。

以上、本稿では、「公民館における子育て期の親の学びとその支援」の第1報告として、「家から一步を踏み出し、子育て主体としての成長を支えていくための講座のあり方」を中心に論じてきた。その結果、「図表6」に見られる、第1段階としての「家から一步を踏み出し」、第2段階としての「人と語り合う」子育て主体として成長中の親たちの姿をとらえることができた。この研究は、次の第2報告につづく。ここでは、同じく「図表6」にある第3段階以降過程をとらえていきたい。

1 「都道府県別にみた合計特殊出生率の年次推移」（閲覧日：2022年10月20日現在）

厚生労働省ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/brth4.html>

- 2 「児童相談所での児童虐待相談対応件数（速報値）」（閲覧日：2022年10月20日現在）
厚生労働省ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000987725.pdf>
- 3 内閣府は、「子ども・子育て本部」を設置し、「少子化対策」では「結婚、妊娠・出産、子育ての各段階でのひとりひとりのニーズに応じたきめ細やかな支援」、「子ども・子育て支援新制度」ではすべての子ども・子育て家庭のために、幼児期の学校教育や保育、子育て支援の量の拡充や質の向上を推進している。厚生労働省は、子育てにかかる経済的負担の軽減や安心して子育てができる環境整備のための施策など、「総合的な子ども・子育て支援」を推進している。（閲覧日：2022年10月20日現在）
内閣府ホームページ <https://www8.cao.go.jp/shoushi/index.html> 厚生労働省ホームページ https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/index.html
- 4 文部科学省は、親が子どもに行う「家庭教育」の充実とそれを支える地域や支援者の「家庭教育支援」に対する働きかけを取り組んでいる。（閲覧日：2022年10月20日現在）
文部科学省ホームページ <https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/katei-kyoiku/index.html>
- 5 本稿の事例で取り上げた福岡県内にある一つの市の条例公民館が作成した2009（平成21）年1月15日発行の「公民館だより」。「子育て講座」を担当する公民館職員が作成している。
- 6 本稿の事例で取り上げた福岡県内にある一つの市の条例公民館の「子育て講座」担当者の公民館職員が作成した年間プログラムをもとに、講師名など地域や個人に関する情報を外して編集した。
- 7 三井為友『婦人グループ活動入門』国土社、1963年。

**Community Centers' Educational Value for Parents with
Children and Types of Support (1)**
– Designing classes that encourage parents to become empowered child-rearing agents –

Haruko MIYAJIMA

Department of Childhood Care and Education Kyushu Women's Junior College
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

This paper reports preliminary findings from a study on the value of social educational facilities such as 'kominkan' (community centers) for parents raising children, based on concrete practices. The study followed the process through which parents who were raising children while feeling alienated and isolated stepped out of their homes, participated in parenting classes at their local kominkan, and emerged as empowered child-rearing agents. The parenting classes first used the Kominkan Newsletter to invite parents and children to the center, and then offered hands-on workshops, and other special mechanisms for interacting with various people in the community.